

「2015 年度 SEND 派遣参加報告書」

京都大学文学研究科博士課程 4 年 中村 昇平

報告者は 2016 年 1 月 5 日から 3 月 13 日の期間、インドネシア大学人文科学部(FIB UI)の Lily Tjahjandari 氏を受入先として、SEND プログラムに参加した。渡航に際しては、FIBUI 傘下のインドネシア研究所(LKI)を受入先として、訪問研究員プログラム(visiting scholar program)を利用してインドネシア大学に籍を置いた。SEND プログラムへの参加にあたっては、本プログラムの趣旨である、日本社会・文化を現地の研究者および大学院生に紹介し、インドネシア社会との比較においてその新たな側面を再発見することを第一義的な目標とした。この目標を達成するために、インドネシア大学で発表会を開催し、日本の村落とインドネシアの村落との比較研究に関する発表・討論をインドネシア語で行った。また、発表に向けてはジャカルタ近郊の都市集落で調査を実施するとともに、その成果を現地研究者・大学院生・学部生に紹介し、議論を重ねた。以下では、今回の SEND プログラムについて、①学習成果、②海外での経験、③プログラム内容、④進路への影響、の四点から報告する。

① 学習成果

本派遣の成果は、調査と発表の二つに分けられる。派遣期間中はジャカルタの西部に隣接する郊外地域であるバンテン州タンゲラン市に滞在しながら、同じく南部郊外の西ジャワ州デポック市にある U 集落に再三通い、集落の調査を行った。同集落では、伝統文化サークル *sanggar seni-budaya* に参加するとともに、集落の老人や青年会の主催者など(主に男性)数人に聞き取り調査を行った。聞き取りは非構造化インタビューの形式をとったため、その内容は集落の制度や慣習から昔の生活の様子や時代による生業の変化まで多岐に渡った。一人につき平均 2 時間程度、録音しながら話を聞いた。また、こうした形式的な聞き取りの機会以外にも、当該集落に頻りに寝泊まりしながら生活を共にし、参与観察を行うとともに適宜聞き取りを行った。こうした調査からはまず、埋葬に関わる慣行や金融講、親族関係の認識など、当該集落の制度的な側面を把握することができた。さらに青年会の衰退や再興に関する話を中心として、集落へのアイデンティティと制度的側面との関わりについても知る事ができた。

こうした調査の成果は 3 月 11 日にインドネシア研究所(LKI)内で発表した。また、これに先立ってブタウィ文化研究所(LKB)の副所長 Yahya Andi Saputra 氏や、インドネシア科学院(LIPI)の研究者、国立イスラム大学(UIN)でブタウィ文学を研究する学生、ブタウィ人の学生組織であるブタウィ学生コミュニケーションフォーラム(FKMB)の学生らに対しても研究の趣旨を説明するとともに、意見や助言を求めた。

インドネシア研究所での発表は「日本とジャカルタ大都市圏の集落における生活パターンの比較研究(*Studi Perbandingan Pola Kehidupan Kampung Jepang dan Jabodetabek*)」というタイトルで行った。発表と議論を合わせると 1 時間半ほどだった。発表の趣旨は以下の通りである。まず日本の農村社会学における集落の捉え方を簡潔に説明した上で、日本の村落とジャカルタ周辺地域の集落(カンブ *kampung*)の重要な違いを指摘した。すなわち、日本では種々の自生的な慣行・慣習を備えた所謂自然村の集落の範囲が行政区分と重なることが多いのに対して、ジャカルタ大都市圏では集落の範囲が行政区分と重ならないことが多いという点である。このことから、ジャカルタ周辺の集落を調査する際には、行政区分を単位とすることは避け、自生的な慣行・慣習を備え、住民の帰属意識の対象ともなっている集落の範囲を単位として考察を始めなければいけないことを主張した。そしてこうした趣旨に沿って、上述のデポック市の集落の事例を紹介した。

発表に対するコメントは多岐に渡った。日本の村落では宗教施設(明治以降は神社)が祭礼の場として中心的位置を占めるが、ジャカルタ周辺の集落では宗教施設(モスクなど)がそうした役割を担わないことなど、具体的な点にまで踏み

込んだ指摘も多く、日本の村落のあり方を比較的視点から再考する上でも大いに参考になった。中でも興味深かった議論は、発表の中心的論点でもあった、行政区分と集落の範囲のズレに関するものである。ジャカルタに限らずインドネシアでは、自生的な集落の範囲と行政区分とが重なり合わないことが多い。ジャカルタ大都市圏のカンプン以外にも、例えばバリ島の集落の単位であるバンジャール *Banjar* や、西スマトラ州における母系親族集団を基礎単位としたナガリ *Nagari* という集落のあり方にも、2000年代の法改正までは類似の状況がみられた。発表会参加者の所感では、これはインドネシアにおける中央政府の抑圧的政策を象徴するものだという。あるいは、20世紀半ばの独立から短期間のうちに、文化・慣習のあり方が大きく異なる住民をまとめなければならなかったという経緯に起因するのかもしれない。翻って日本の状況に鑑みれば、日本においては江戸時代以前から、寺を通して戸籍を把握するなど、自生的な村落の単位が行政区分として取り込まれていた歴史的経緯がある。いずれにせよ、本派遣プログラムの集大成であった発表の趣旨は参加者によく理解していただくことができ、また、その意義も高く評価して頂いた。日本とインドネシアの集落パターンの比較を試みた研究はほとんどないらしく、報告者とインドネシア人研究者が、各々の国の村落のあり方を比較的視点から再考することを通して、国のあり方を問い直す議論にまで進展させることができた。

② 海外での経験

報告者はこれまでも、2ヶ月から3ヶ月の期間で数度現地調査を行ってきたが、これまでの滞在と比べて今回の滞在では特に、研究者・学生とのネットワーク構築という点で豊かな経験ができた。Melani Budianta氏、Lily Tjahjandari氏の助力によるインドネシア大学の研究者・大学院生との交流の他にも、様々な場で研究者・学生と交流をもつことができた。在ジャカルタの国立研究所であるインドネシア科学院(LIPI: Lembaga Ilmu Pengetahuan Indonesia)では、政治学や文化人類学、カルチュラル・スタディーズなどを専門とする研究者に対して本派遣に関わる研究の内容を説明し、議論する機会を複数回もつことができた。また、ブタウィ文化研究所(LKB: Lembaga Kebudayaan Betawi)の副所長Yahya Andi Saputra氏には、LKBでの研究会ほか種々の研究会に招待していただき、氏をはじめとして複数のブタウィ研究者や社会運動家と本研究について議論する機会が得られた。また、そうした研究会で知り合ったブタウィ学生コミュニケーションフォーラム(FKMB: Forum Komunikasi Mahasiswa Betawi)の学生とも、研究に関して議論する他にも、インドネシア語の文章の校正をしてもらうなど、良い関係を築くことができた。こうしたネットワークでの議論からは、本派遣に関わる研究が、インドネシア社会の研究という面でも、ジャカルタ/ブタウィの研究という面でも意義のあるものだということが確認できた。前者については前項で既に述べた。後者についても、ジャカルタ周辺地域のブタウィ集住集落の特徴を一般的に説明したものはあるが、具体的な集落の事例に沿って説明したものはまだほとんどないということが分かった。それだけに、インドネシア国内における関連研究の文脈の中でも、本研究が重要性をもつということが確認できた。また、調査対象集落の人々とコミュニケーションをとる中で、具体的な集落の事例を調査して論文あるいは書籍の形にすることが、当地の人々にとっても意味のあることだという確信も得られた。今回の滞在中で、研究者・学生・調査対象地域の人々とこのような形で交流をもてたことは、大変貴重な経験となった。

③ プログラム内容

プログラム期間を通して、インドネシア大学人文科学部(FIBUI: Fakultas Ilmu Pengetahuan Budaya, Universitas Indonesia)内のインドネシア研究所(LKI: Lembaga Kajian Indonesia)所長、Lily Tjahjandari氏を受入先教員として、同大学の訪問研究員プログラム(Visiting Scholar Program)を利用し、訪問研究員として在籍した。プログラムの実施概要は以下のとおり。

1月4日、出国

1月5日から3月13日の期間、週3-4日ほどの頻度でU集落での調査

(1月23日、2月11日、3月6日にはインタビューを実施)

2月4日、インドネシア科学院での研究会に参加
2月5日、プタウィ文化研究所での研究会に参加
2月18-19日、Bentara Budaya Jakartaでのシンポジウムに参加
2月29日、インドネシア科学院での研究会に参加
3月10日、インドネシア科学院で研究会の会合に参加
3月11日、インドネシア大学人文科学部、インドネシア研究所での発表
3月14日、帰国

④ 進路への影響

本プログラムの成果の一部は、2016年7月にオーストリア、ウィーン大学で開催される国際社会学会第3回社会学フォーラム(3rd ISA Forum of Sociology)において口頭発表の形式で発表し、大会に際して提出する論文はプロシーディングスとして公刊されることが決まっている。また、本派遣で行った集落の調査は、対象を広げて2016年8月から2年間をかけて継続する予定である。今回、日本とインドネシアの集落のあり方の比較研究をテーマとして発表したことで、足りない部分も多く見えてきた。この研究をより進展させるためには、第一に、日本とインドネシアそれぞれにおける集落研究の知見をより広く渉猟して適切に整理することが必要である。加えて、日本においてもインドネシアにおいても、具体的な事例研究を出来るだけ多く積み重ねることが望ましい。そのためにもまず、2016年から2年間を予定している長期調査では、ジャカルタ周辺地域における調査対象を今回対象とした集落以外にも広げ、出来る限り多くの事例を比較検討することを当面の目標としたい。こうして長期調査に向けた方向性が定まったことも、本プログラムから得られた重要な影響であった。